レッスン：19“A”

テーマ：リアリティー（＊実相）

REAL19A/DOC

私の兄弟・姉妹達、スピリット・光・火の子供たちよ。私たちは常に神、絶対、神の聖性に包まれています。

　このレッスンでは実相(\*Real）と理解可能な現実の部分との違いを明確にするために、特別な注意を向けます。

“リアリティー”とは何であり、“リアリティーと思えるもの”とは何でしょうか？人々はその言葉の偉大な意味を探求することなしに、常にリアリティーという言葉を使用しています。

私たちは繰り返し、リアリティーとは絶対存在の別名であると述べてきました。それはLifeそれ自体であり、その現れが元型、イデア、法則、原因なのです。

リアリティーとは聖なるモナドのスピリット存在(Holy Monad Spirit Being)としてのインナーセルフであり、それは時間・空間を超越している私たちのセルフです。

しかし、人間の意識でそれを理解するためには、最初にそれが放射され、現れたものを学ぶ必要があります。今や２つの状況があることがわかります…実相(\*Real)と理解可能な現実。

　　実相(\*Real)とは不変、永遠の絶対存在であり、それの現れがLifeという現象です。

私たちは絶対存在をLifeそれ自体と同一視しており、それは生(Life)なのです。しかし、Lifeの現象の背後にあるLifeそのものは、普通の人間の意識では理解不可能です。Lifeの現象ではなくLifeそれ自体は、意味およびノエティカルなイメージの構造で把握することは不可能です。それは聖なるモナドそれ自体、およびその投射である魂のセルフ・エピグノーシスによってのみ理解可能なのです。それは（＊現在の）パーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスが、“理解可能な現実”という限界と拘束から自由になり、そのインナーセルフのリアリティーの中へ浸透した瞬間に理解が生じるのです。

リアリティーとしての私たちのセルフとは、私たちが聖なるモナドと呼ぶ最も内側のセルフだけでなく、魂のセルフ・エピグノーシスとしてのインナーセルフなのです。魂のセルフ・エピグノーシスとしてのインナーセルフは、Lifeの現象の諸世界の中に、それ自身の微小なスパークを投射することによって自己を現したのです。

これが私たちのセルフの部分です。このセルフは分離・対極の世界に下降し、原因・結果の法則の下で転生を繰り返して体験を重ね、最終的には上昇して源に戻ります。

テオーシス（＊数多くの転生を経た後に到達する成長の最終段階。神との再合一）という観点から見れば、魂のセルフ・エピグノーシスは全ていつか、神、絶対存在に関する知識を持つようになり、またそれ自身が神の似姿であることを知るようになるのです。実相（＊Real）に関する知識を持つようになるのです。

それでは“現実と見えるもの”、あるいは“現実の理解可能な現れ”の探求に戻りましょう。私たちは実相（Real）の投射を注意深く勉強する必要があります。もし実相（Reality）を元型、イデア、法則、原因であると考えれば、現実の理解可能な部分はマインドを通じてのその投射です。

マインドとは実相がそれ自身を顕現するために用いるスーパーサブスタンスである、と何回も述べてきました。粗雑な物質界を含む全ての宇宙（＊複数）はマインドの現れであることを思いだしてください。

現象の背後にある原因とはリアリティーつまり実相それ自体であり、それは普通の意識による理解を越えたものです。リアリティーとしての絶対は、元型、法則、イデア、原因さえも越えています。その聖なる状態のリアリティーを描写することは不可能です。

Page2

そのような状態とは、神が夢見の形に入る状態と同じであると見なすことができるでしょうか？違います。なぜなら、実相という観点から見ると、それは冒涜に等しいものです。

神がそれ自身の中で夢を見て、神が瞑想中に、ダイナミックに、そしてロゴス的に宇宙を投射する、と教えているグループもあります。夢を見る神！夢を見るとは、無意識の心の中から、および汎宇宙的無意識の記憶から、あるいは幻想状態で体験する既存の状態から、記憶を放射することである、ということを私たちは知っています。これが私たちが理解している“夢を見る”の意味です。しかし、私たちがマインドを使って注意を集中させ、意識的に瞑想し、速やかに形成されるノエティカルなイメージをもたらすのは、それとは異なった状態です。それはもはや夢見の状態ではなく、意識的、積極的で目的を持った活動です。

全く異なったそれら二つの状態を調べることによって、それ自身のアウタルキー（＊自足）内にある絶対存在は、夢を見ている状態ではないことがわかります。むしろ、神の聖なる黙想とブレーシス（＊神の意志）の結果として、それはそれ自身を投射し、マインドを使用して宇宙を創造しているのです。

神の本質に関して人々が抱いている間違いがもう一つあります。神は全ての原因であり創造者であるから、神はまたLifeの現象としての実存の諸世界の中で人間が創造する出来事の原因でもある、と一般に見なされています。神は全ての原因ですが、その原因とは神の黙想を通じて表現されるもので、その結果、調和の中の聖なる、不動の法則である元型、イデア、法則、原因が創造されるのです。

人間は無知なるが故に調和をバランスへと変え、行動を通じてバランスの均衡を乱すのです。この均衡が乱されると、原因・結果の法則が影響を受け、再びバランスを取り戻す必要が生じてきます。人間にとってこれは、一般に苦しみを伴うプロセスを経験しなければならない、ことを意味します。

神は全ての原因ですが、サイコノエティカルなイメージの形成を通じて、さらに、たとえ瞑想を通じてであっても、絶対存在の多重性の部分である最も内奥のセルフとしての聖なるモナドが何であるかを理解しようとする試みは無意味なことです。絶対存在および聖なるモナドという言葉で、私たちは何を理解するべきでしょうか？言葉を通じて意味と解釈を作り上げようとせず、絶対存在、および聖なるモナドとしての私たち自身を、実相(Reality)と見なすべきです。絶対が創造します。夢を通じて創造できるのでしょうか？あるいは、創造とは神の黙想とブレーシス（＊神の意志）の結果として、キリストロゴスと聖霊を通じて生じるものなのでしょうか？

私たちは地球という惑星の実体である人類が、瞑想と推理を通じて素晴らしいものを作り上げるのを目にしています。勿論、人間の知性は絶対存在の絶対英知に匹敵するはずがありません。

結果が原因より偉大になりえるでしょうか？セルフ・エピグノーシスを表現する人類と呼ばれる創造物が、様々な状況や驚くべき品々を創造し、それが原因よりも優れているということがありえるでしょうか？原因がその結果より劣っていたり、小さいことは決してない、という自明の理を考えてください。現実的になりましょう。宇宙のたった一日で、今日の人類は棒や棒切れを手に持って洞窟で暮らしていた状態から分かれたのでしょうか？

現在のパーソナリティーに酔っている人間の魂は、最終的には成熟して、物質、サイキカル、ノエティカルを含む全ての創造界の中で聖なるセルフ・エピグノーシスを表現するようになるでしょう。

Page3

これから幾世紀も後に、人類はどのようにして自分自身を表現するのでしょうか？当然、人類はますます拡大していく気づきを通じて自分自身を表現するようになり、最終的には思考・行動としての自分のセルフ・エピグノーシスが、自らの本質的特質を表現するようなレベルにまで到達するでしょう。

今日の人間は、自分たちが偶然の産物だと見なしている現象を研究しています。実際には、より深いレベルのリアリティーつまり実相が現象として現れたものを研究しているのですが、そのリアリティーの中に浸透し、足を踏み入れようという願望、傾向を全く抱いていません。いつか人間はこのリアリティー（実相）に気づくようになりますが、今の所、私たちな皆、イリュージョン（＊錯覚）と理解可能なものの世界の中にいるのです。

　　この惑星上の、物質界における真摯な神秘家たちが幾世紀もの間、この状況を見て、次のような結論に至りました：

「“理解可能なもの”とは時間・空間の産物であり、それは実相（\*Real）の中では存在しない状態である。しかし、時間・空間は私たちが“永遠の現在”と呼ぶリアリティーの現れであり、それ故、過去・現在・未来は時間・空間の中における出来事や現象の連続を現し、それらの出来事や現象とは、理解可能な範囲のなかに実相(Real)が投射されたものである」

今になってやっと、これらの真実へアプローチし始めた科学者もでてくるようになりました。時間・空間は主観的な状態なのです。“理解可能なもの”の背後には源として実相（\*Real）が存在し、源である実相が、私たちが研究、理解しようとしている時間・空間の種々の現れを提供しているのです。

ですから、次のように結論付けることができます。私たちが成長を遂げ、サイコノエティカル次元においてもっと意識的に生きるようになると、“実相”と“理解可能なもの”との間の区別の問題は、私たちが物質界において関っている問題と大体において同じであることを発見するようになります。サイキカル界もノエティカル界も同じ深い実相からの産物であり、その深い実相は概念的理解を越えたものです。そして、その同じ深い実相が物質界において、私たちに“理解可能な現実”を提供しているのです。なぜなら、本当は二つ、三つ、あるいは四つの世界が存在しているのではないからです。実際は、同じ深い中心を持つ一つの世界だけが存在するのですが、その一つの世界が多様な仕方で現れているのです。キリストはそのことを、「主なる父の宮殿には多くの邸宅がある」と述べているのです。

次のような疑問が出てきます：サイコノエティカル次元における世界もまた、物質宇宙内の“理解可能な現実”の世界なのか？物質界における理解可能なものと、サイコノエティカル界における理解可能なものとの間に違いがあるのか？

　　勿論、違いがあります。物質界においては、ノエティカルなイメージや意味として理解できるものは、五感によって肉体の外から来るものを受け取ったその印象を通じて創られます。次に、外から来たその印象をサイキカル体およびノエティカル体を通じて解釈するのです。

さて、サイキカルな光とノエティカルな光はその現れにおいて、物質次元の光よりもはるかに強烈で、完全です。

　　パーソナリティーのセルフ・エピグノーシスとしての私たちが、物質的光を通じて対象物または光景に関する知識を得る時、物質宇宙における印象として、時間と空間は絶対的な意味と重要性を帯びています。物質界において、印象は外側から内側へと移動し、私たちの中で意味とサイコノエティカルなイメージを生みだします。

しかし、サイコノエティカル界に入ると、私たちはこのように外側から内側へというようにして印象を得るのではなく、むしろ私たちの内側から得るのです。サイキカル次元（＊複数）に住んでいる人間の大部分は、物質レベルの錯覚を持ち込んでいて、この力学（＊印象が内側から来ているという事実）に気づいていません。

Page4

物質界では、ある物について知るためにはそれに近づく必要があります。サイキカル界では、全ては私たちの方に来るのです。そして何回も述べたように、サイキカルおよびノエティカルな光の中では、私たちは全てのものを時間・空間的意味の制限なしに見ることができます。サイキカルおよびノエティカル界では、時間・空間的意味は超越されていて、それらの世界において私たちがやるべきことはただ一つ、自分自身の中で何かに注意を向けるだけなのです。何かに注意を向けると、私たちはそこにいるのです。全ては私たちの内側にあるのです。サイキカル界では、私たちが物質界で肉体を移動させるように、サイキカル体をあちこちに移動させる必要はありません。サイコノエティカル界では、単に注意を向けるだけで全ては私たちの方に来るのです。

それなら、サイコノエティカル界での体験は物質界における体験よりも実相（＊real）に近いと考えてよいのでしょうか？同じように、サイコノエティカル界を上昇すればするほど、相対的実相(relative Reality)に近くなると考える必要があります。

しかし、サイキカルおよびノエティカル界では、私たちは何であれ私たちの意識に来るものとなるのです。従って、それらの世界では私たちは探検して、理解可能なあらゆるものの背後にある実相についてもっと気づくことができます。物質界では障害とか制限があって、相対的実相を垣間見るのがより困難になっていますが、それらがありません。

　　物質界の中では、人々は容易に四つのエレメントの魅力に魅かれてしまいます。人々は五感を通じて与えられた解釈および誤った解釈に夢中になり、盲目となります。物質界を絶対的現実であると認識してしまいます。見て、触れ、それを確かなものと感じ、それが現実であると見なすのです。しかし、実際にはそれは現実ではありません。人々が現実であると誤解しているものは、現実、実相の中の理解可能で、滅びゆく、絶えず変化している現れの部分にすぎないのです。

理解可能なものから実相の中へと浸透した時初めて、理解可能な世界に対するパワーを得ることができるのです。物質化や非物質化など、高度の神秘家たちが永劫の昔から行っている現象は奇跡と呼ばれています。神秘家が相対的実相(relative Reality)の領域に入る唯一可能な方法は、インナーセルフの特質を表現するために現在のパーソナリティーの諸体を支配、マスターして、サイコノエティカルな上昇を遂げることによってであり、テクニカルな手段によるものではありません。テクニカルな手段による現象はエレメンタルの創造によるものであり、ブレーシス（＊全肯定的な神の意志）によるものではありません。

私たちが成長し、リアリティー、実相の世界に入ると、全てが可能となります。私たちが本質として持っているパワーを通じて、より完全で全的な方法で自分自身を表現することができるのです。つまり、聖なる存在として、実相（Real）の中に根ざすようになる時、その本来の内なる使命を果たすことになるのです。

上級の神秘家、上級の真理の探究者は実相（Real)の世界に入り込むことによって、普通の人間には信じられないようなサイコノエティカルな能力を獲得します。例えば、神秘家はいつでも自由に、物質界での認識と体験の戸口を閉じることなしに、超意識のセルフ・エピグノーシス(\*Self-Epignosis)を通じてサイキカル界に入ることができるのです。

　　さらに、神秘家は実相の中に入ることによって時間・空間を越えたところに行き、その結果、物質界、サイキカル界、ノエティカル界、さらにそれ以上の次元から同時に印象と体験を得ることができます。繰り返しますが、時間と空間は物質宇宙、サイキカル次元、ノエティカル次元における理解可能な現実なのです。

私たちはこの有利なポイントから探求を始めるべきです。時間と空間の意味は確定的ではなく、それらは変化し、相対的なものです。例えば、ある出来事が行なわれ、私たちはそれをある仕方で認識するとします。時間と空間は、物質レベルから引き出した意味によって祝福されています。もし私たちがこの同じ出来事を記憶の中から掘り起こすと、その出来事に関係する空間と時間の意味を得ることになります。しかし、それらの意味は、私たちが実際にその出来事を体験している最中に私たちが形成した意味とは大きく異なっています。

仮に、私たちが山に、その後で海に遊びに出かけるとします。その旅行の間、私たちは注意を向け、体験を吸収します。普通の人間は体験の非常に僅かな断片しか吸収しません。というのも、完全な意識で周囲と関係しているわけではないからです。彼らは絶えず注意を向けている方法を知らず、従って、単調で機械的な仕方で日常生活を過ごしています。しかし、そのような旅行では、人間は誰でも何らかの体験を得ます。そのような体験をした人間は、自分の記憶の貯蔵庫からその旅の体験を呼び起こします。彼はその時の行動をたどり、自分の体験の枠内における時間と空間の意味を、意識の中で思い起こします。

今や、時間の要素は非常に異なっています。なぜなら、彼はその過去の旅の体験へ注意を向けるのを止め、別のことに注意を向け、もし望むなら、再び旅の体験へと意識を戻すこともできるからです。

サイキカルおよびノエティカル次元内では、時間の動きは、物質的現実におけるものとは異なって体験されます。物質界においては、人間は生じた過去の出来事に再び戻ることはできません。しかし、記憶を通じて、人間はそれに関連する、この場合は旅行の時の情緒、感じ、思考を再体験することができるのです。物質界では、その出来事は一度起こるだけです。しかし、時間・空間内で私たちは同じ出来事を、特定の体験という限界内の一連の意味あるものとして繰り返すことができます。そして、もし望むなら、私たちは物質界でかって体験した出来事を整理したり、歪めたりできるのです。時間の意味が、パーソナリティーのセルフ・エピグノーシスの上に及ぼしている影響をもっと深く認識できるようになるために、後にサイコノエティカルなエクササイズを行います。

　　私たちは現在のパーソナリティーの限られた気づきをもっと広げ、大きくしようと願っています。そうすることによって、インナーセルフと同化し、魂のセルフ・エピグノーシスとしてのエピグノーシスの輝きを放射することができ、最終的に時間・空間との関係における“理解可能なもの”の意味のマスターとして、実相（\*Real)の内側に入ることが可能となるのです。

最愛のお方が弟子に述べた如く、私たちは死を味わうことのない人々の一人となるでしょう。死とは意味です。それは、印象と経験を吸収する不死・不変のセンターからの完全なる変容を意味します。死はインナーセルフの終りではありません。インナーセルフは究極的にそれらの印象を吸収し、解釈します。

　　私たちがその状態に到達する時、聖パウロの「滅びるものは不滅を身にまとい、死すべきものは不死を身にまとう」という言葉が理解できるようになるでしょう。

私たちは常に神、絶対、神の聖性に抱かれています。

EREVNA/REAL19.EN/WP2/19A/.